Teach Me Tonight
ティーチ・ミー・トゥナイト

Nicole Henry with Eddie Higgins Trio
ニコル・ヘンリー・ウィズ・エディ・ヒギンズ・トリオ

1. 恋人よ我に帰れ
Lover Come Back To Me《O. Hammerstein - S. Romberg》(3:52)
2. ブルー・スカイ
Blue Skies《I. Berlin》(3:25)
3. ティーチ・ミー・トゥナイト
Teach Me Tonight《S. Cahn - G. De Paul》(4:34)
4. ブレイム・イット・オン・マイ・ユース
Blame It On My Youth《E. Heyman - O. Levant》(5:10)
5. あなたはしっかり私のもの
I've Got You Under My Skin《C. Porter》(3:38)
6. エンジェル・アイズ
Angel Eyes《Earl K. Brent - M. Dennis》(6:56)
7. サマー・ウィンド
Summer Wind《H. Braddtke - J. Mercer - H. Meier》(3:27)
8. クライ・ミー・ア・リバー
Cry Me A River《A. Hamilton》(5:58)
9. 夜も昼も
Night And Day《C. Porter》(3:45)
10. あなたは恋を知らない
You Don't Know What Love Is《D. Raye, G. De Paul》(5:37)
11. ス・ワンダフル
'S Wonderful《I. Gershwin - G. Gershwin》(3:28)
12. ヤング・アット・ハート
Young At Heart《C. Leigh - J. Richards》(3:37)

ニコル・ヘンリー Nicole Henry《Vocal》
エディ・ヒギンズ Eddie Higgins《piano》
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart《bass》
ジョー・アシオーネ Joe Ascione《drums》

録音 : 2004年10月14日、11月3&4日　アヴァター・スタジオ、ニューヨーク

℗© 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded by David Darlington at Avatar Studio in New York
on October 14 , November 3 & 4 , 2004. Assistant : Peter Doris.
Mixed and Mastered by Venus 24bit
Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Designed by Taz.

■新進女性歌手ニコル・ヘンリーとエディ・ヒギンズのスリリングな共演

ジャズやジャズに関連した音楽ならなんでも聴くほうだが、とくにヴォーカルが好きで、レコード屋に行っても、まずヴォーカル・コーナーからアルバムを探すことが多い。このニコル・ヘンリーには初めて出会った。キュートで、ちょっとセクシーで、きれいな声をしている。アメリカで出たデビュー・アルバム「The Nearness of You」のジャケット写真を見なければ、若い黒人女性歌手とは気づかなかったかもしれない。黒人歌手にありがちなアクの強さがなく、さらっとして、素直に、ストレートに歌っているので耳に心地よくひびく。

とくに、このアルバムはピアノの名手、エディ・ヒギンズ・トリオとの共演で、聴く前から期待で胸が高鳴ったが、うれしいことに期待通りのすてきなアルバムだった。

歌のアルバムといえば、歌はもちろん大切だが、伴奏というおうか、共演のミュージシャンも大いに気になるところだ。たいていはピアニストが伴奏のうまいピアニストかどうかで、アルバムの成功・不成功が決まることもあるように思う。アメリカには伴奏がうまいというか、伴奏専門のようなピアニストも何人かいた。エラ・フィッツジェラルドの伴奏が印象的だったエリス・ラーキンズ、ビリー・ホリデイの伴奏からビリー・エクスタインの伴奏者になったボビー・タッカーをすぐ思いつくが、エクスタインはいつもボビーを紹介するとき「ワイフとよりもつき合いの長いボビー・タッカーです」といって笑わせていた。ウィントン・ケリーも「ぼくはダイナ・ワシントンの伴奏をすることでグルーヴィなフィーリングを身につけた」と語っていたことがある。ポール・スミスやトミー・フラナガンも、エラ・フィッツジェラルドの伴奏も印象的だったピアニストだった。思い出せばきりがないが、アン・バートンとルイス・ヴァンダイク、「ナイト・イン・マンハッタン」におけるリー・ワイリーとジョー・ブッシュキンのコンビも忘れられない。

話をもどして、ニコル・ヘンリーとエディ・ヒギンズ・トリオとのコンビはどうなのだろうか。ヒギンズはベテランでうまいピアニストだが、いわゆる伴奏専門のピアニストではなく、ソロイストである。それゆえか、このアルバムは歌とピアノがみごとに両立しており、歌も楽しめるが、ピアノ・プレイも楽しめるというのが、聴きどころではなかろうか。もちろん、ヒギンズの歌伴はうまい、驚くほどうまい。よく知られているように、ヒギンズ夫人は、名高いピアニスト、歌姫のメレディス・ダンブロッシオである。彼女は9歳年下で、'88年に結婚している。ヒギンズは彼女の伴奏をしたこともあり、歌伴のコツは十分に知り尽くしており、そのコツを生かしたみごとなニコルとのコラボレーションがみられるのが本作だと思う。ピアニスト、エディ・ヒギンズの表現力の幅の広さを堪能することもできて、ぼくはこのアルバムに大いに満足した。

ところで、以前は黒人歌手といえば、ソウルフルで、ダイナミックで、アクの強い人が多かった。ダコタ・ステイトンとかニーナ・シモンとか、そしてサラ・ヴォーンやカーメン・マクレエの歌も、かなりの重量感を感じたものだったが、最近の黒人ジャズ歌手は少し傾向が変わってきたのではなかろうか。キュートで軽やかで、白人とあまり変わらない歌い方をする人が出てきているように思う。このような軽やかなタイプの黒人歌手は聴きやすいし、くり返し聴いても飽きがこない。こういう黒人歌手が多くなりはじめた理由はぼくにはよくわからないが、あるいは若い黒人たちの生活が変わり、黒人社会だけで暮らすのではなく、社会的地位も上がり、一般社会への進出も目立つようになり、白人と一緒の生活も多くなり、少しずつ白人との差がなくなりつつあるのかもしれない。その意味でもニコル・ヘンリーは新しいタイプの黒人女性歌手だし、この一作で日本でも脚光を浴びてほしいと願っている。

■曲目と歌について

ぼくはこのライナーノーツを書くために3回ほど聴いたが、エディ・ヒギンズ（ピアノ）、ジェイ・レンハート（ベース）、ジョー・アシオーネ（ドラムス）とのコラボレーションとしてのアルバムという印象も受けた。やはりヒギンズの味わい深いピアノなくしては、このアルバムは成り立たなかったと思う。

しかし、若いニコル・ヘンリーもよく頑張って歌っている。日本制作のアルバムなので、全12曲のほとんどが日本でもよく知られているスタンダードばかりだ。「恋人よ我に帰れ」「夜も昼も」「あなたはしっかり私のもの」「エンジェル・アイズ」「ティーチ・ミー・トゥナイト」など、どれもすてきな出来だが、ぼくが最初に飛びついて聴き、いちばん気に入ったのが「ヤング・アット・ハート」である。ぼくとしては、まずこの曲から聴いてほしいという気持ちが強い。

スタンダードだが、意外に歌う人は少ないが、美しいバラードだ。知っている人も多いと思うが、50年代の中頃にフランク・シナトラが歌って大ヒットした曲なので、ぼくのような古い世代の人間は当時、耳にタコができるくらいよく聴いた歌である。'54年に出版されているが、同名の映画の主題歌で、この映画のビデオはアメリカで出ていて、向こうで買ってきてときどき観ているが、フランク・シナトラとドリス・デイの主演で、二人は息が合っている。

この歌は作・編曲で名高いジョニー・リチャーズが作曲し、女性のキャロリン・リーが作詞したものである。もともとはジョニーが'39年に「ムーンビーム」というタイトルで作曲したインストルメンタル・ナンバーで、これに後年キャロリンが歌詞を書き、歌曲になった。この歌こそニコル・ヘンリーのキュートで、ナチュラルで、哀愁を含んだ魅力的な唱法がいちばんよく出ていると思う。だからぼくはこのアルバムを聴き返すときは、まずこの歌から聴くことにしている。

ところで「サマー・ウインド」だが、実はこの曲もフランク・シナトラが歌い、'66年にリプリーズに録音している。そして「ヤング・アット・ハート」と同じくシナトラ・ナンバーということは、ニコル・ヘンリーはシナトラの歌が大好きなのかもしれない。もし来日したら、そのことを聞いてみたい。実際、ニコルは呼んでほしい歌手の一人だ。

「サマー・ウインド」はドイツの曲で、ヘンリー・メイヤーが作曲し、ジョニー・マーサーが作詞している。この2曲に、ニコル・ヘンリーの個性と持ち味がよく出ていると思う。ほかの曲ほど有名でない2曲を歌ったことで、このアルバムは聴く者に新鮮な印象を与えてくれる。

全曲の作詞・作曲に触れるスペースはないかもしれないが、「恋人よ我に帰れ」はみんなが歌う有名曲だが、この曲を聴くことによってニコルの実力がわかるともいえる。

「ブレイム・イット・オン・マイ・ユース」はそれほど有名ではないが、美しい歌だ。キャバレー歌手的な、語りかけるように歌ったバラードで、このような歌にぼくはニコルの個性を発見する。作詞は・エドワード・ヘイマンで、作曲はクラシックの天才的なピアニストで、ジョージ・ガーシュインの親友でもあったオスカー・レヴァント。オスカーは「アメリカ交響楽」「巴里のアメリカ人」など多くの映画に出演していた。ピアニストの曲なのか、エディのピアノがさえる。

「夜も昼も」は軽快にボサ・ノヴァのリズムで歌っているのが楽しい。

「クライ・ミー・ア・リバー」はジュリー・ロンドンの歌でよく聴いたものだが、ニコルもとてもセクシーに歌っていて聴かせる。

「ブルー・スカイ」はとてもいい。ニコルはこういう古い曲にいい味を出す歌手だ。なんといっても自然なスイング感が心地いいし、エディのピアノにも惚れ惚れする。

「ティーチ・ミー・トゥナイト」は意表をつく、ゆったりした粘っこい歌い方で、ほかの歌手が歌ったものとの区別化に成功している。ソウルフルな歌い方とでもいったらいいだろうか。

「あなたはしっかり私のもの」は再び軽やかなボサ・ノヴァ調で歌っていて気持ちがいい。さらっと歌っているようで、実は彼女の歌唱力の確かさがみられる歌いっぷりだ。ヴォーカル通ならこの曲からでも、彼女の実力を見抜くであろう。

「エンジェル・アイズ」はバラードの名曲で、名唱も多いのだが、ここではベテラン・ピアニスト、エディ・ヒギンズが表情に富んだ表現で、この歌がもつドラマティックで詩的な味わいを、ニコルの歌をバックアップしながら巧みに表現している。エディのピアノあっての一曲ではなかろうか。しかし、彼女もエディと一緒に、このバラードをみごとに歌い上げており、その歌唱力を見せつけたともいえる。

「スワンダフル」は「ブルー・スカイ」同様に、古いスタンダードを軽快に小粋にスイングして歌うが、こういったシンプルな歌はこのような歌い方に限る。彼女は若いが、歌のコツを知っているようだ。

「あなたは恋を知らない」はアレンジが新鮮で、まるで新しい歌のように聴かせてくれるし、上品でディグニティのある“歌曲”に仕上げているのがユニークだ。それに、ニコル・ヘンリーがすてきな美声の持ち主であることを改めて知った。

このアルバムは何回も聴き返すと、歌の秘密や魅力が随所に隠されているのを知ることができる。ぼくも気づいたいくつかを指摘したつもりだが、まだまだ聴き逃しているかもしれない。ぜひ、じっくり聴いて、隠されたディテールの魅力を発見してほしい。

岩浪洋三